world's **children**

No.34

Afghanistan Japan Myanmar Nepal Vietnam



Save the Children

Message
ご挨拶

2005年を飛躍の年に！

セーブ・ザ・チルドレン・ジャパン（SCJ）は「質的にも量的にも強い団体を目指す」という方針のもと、この１年間ダイナミックに動いてきました。４月１日をもって本部機能を大阪から東京に移し、また、広報・マーケティング部門の強化に取り組みました。そして、いよいよ変革の第一歩を踏み出します。

まず、ホームページをデザイン・内容ともに大幅にリニューアルします。アクセスがより簡単になり、活動内容がよりわかりやすく、そしてネットからの支援アクセスも、簡単にできるようになります。また、今お手元でご覧いただいている広報誌も、今号から大きく変わりました。より大判のA4サイズになり、内容も読みやすくコンパクトにまとめて、セーブ・ザ・チルドレンの活動を身近に感じていただけるものにしています。また、個人情報保護の観点から、協力者リストは非公開としました。

こうした全体的な見直しにより、コストの大幅削減も可能となり、より効率的な事業活動が可能になると考えています。

セーブ・ザ・チルドレンの目的は一つ、世界中の子どもたちの笑顔です。そのために2005年、SCJは世界連盟の重要な一翼を担うべく、大きく飛躍します。引き続きご支援いただけますようお願いいたします。

セーブ・ザ・チルドレン・ジャパン（SCJ）
理事長

立野純三

Contents No.34 Issue

1 ご挨拶
2 特集　ベトナム・イエンバイ省で進む「総合的子供の発達事業」
5 アフガニスタン
5 緊急報告
6 ミャンマー
6 ネパール
7 インタビュー　改めて考える「栄養不良」
8 Speaking Out　みんなで話そう・Volunteer
9 SCJのプロフィールと寄付のお願い
10 パートナーの紹介







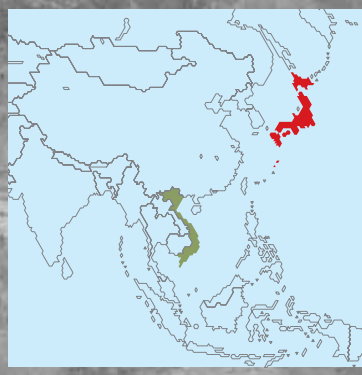
Note 1
【イエンバイ省の子どもたち】

イエンバイ省には、約14万世帯、70万人が暮らしています。ベトナムの全人口の86％を占めるキン族は、村によっては人口の1％でしかなく、残りの人口はザオ族やタイ族、ヌン族など30以上の少数民族が占め、9つの市町郡の下に180の地区・村があります。
省内の人口のうち、25万人が15歳未満の子ども。乳児死亡率は24人に対して1人で、これはベトナム北西部の中では比較的“まし”な数値といえますが（平均は17人に1人）、全国平均の33人に1人、ホーチミン市を含む南東部の58人に1人に比べると、まだ高い水準です。









Special Report

Vietnam

特集　ベトナム・イエンバイ省で進む「総合的子どもの発達事業」

経済発展に取り残された農村部で健康と栄養の改善に取り組む

1986年から開始されたドイモイ（刷新）政策のもと、ベトナムは急速に経済発展を遂げ、現在も成長を続けています。しかし、この恩恵に預かっているのは、一部の都市在住の人々に過ぎません。全人口の75%が居住する農村部では、貧しいために食べ物を入手できなかったり、防寒の備えがなく、風邪や肺炎、結核などの疾病にかかる人が多くいるのです。SCJでは、こうした取り残されたベトナムの子どもたちの健康改善を目指して総合的な事業に着手しています。

まだ栄養不良が続いている

2000年の統計によれば、ベトナムにおける栄養不良は、全人口の22%にまで改善されていますが、5歳未満の子どもの栄養不良は全体の1/3にのぼり、特に農村部や山岳地域、遠隔地域では4割を超える状況にあります。また、子どもの3人に1人は2,500グラム未満の低体重で生まれています。都市部との格差を是正するために、ベトナム政府保健省が推進する保健戦略計画では、農村部・山岳地域・遠隔地域の住民、特に少数民族への十分な保健医療の提供が強調されています。

SCJは、2003年7月からJICAとのパートナーシップによる「総合的子どもの発達事業」に着手しました。この事業は、ベトナム北西部の山岳地域にあるイエンバイ省の約3,000人の3歳未満の子どもと、その母親を始めとする家族と妊産婦、地域住民を対象に、栄養改善と健康状態の改善を行うものです。

子ども、女性、母親の総合的指標改善を

わたしたちが行う「総合的子どもの発達事

Vietnam



Note 2

「総合的子どもの発達事業」の主な内容

［子どもの栄養改善］
(1)指導者研修
(2)子どもの体重測定
(3)栄養教育回復プログラム
(4)母親の離乳食調理実習
(5)離乳食給食

［母親の産前検診］
(1)指導者研修
(2)基礎的医療機器の提供
(3)妊産婦の定期検診
(4)鉄剤やビタミン剤投与や各種予防接種

［家庭菜園普及］
(1)家庭菜園作成指導
(2)モデル農家の選定
(3)各家庭での指導



業」は、乳児死亡率や5歳未満児死亡率、妊産婦死亡率、栄養不良、ビタミンA欠乏症、低体重出生率などの、子どもに関する指標の改善や、妊産婦の貧血症割合、予防接種や定期産前健診実施率など、母親・女性に関する指標の改善などを目指すものです。ベトナム政府保健戦略計画で目標とされていること、つまり一時的な栄養改善に終わるのではなく、地域開発を包括しています。また、これらに加えて、家庭での食物保全も行っています。

具体的には、家庭菜園の作り方を教え、実際の運営方法まで指導する「家庭菜園活動」を行い、実った野菜や飼育したブタや鶏の卵に加え、小川で取れるタニシや周りにある草のような自然の中に豊富にあって調理方法次第では十分栄養価の高いものになる食材を使う「子どもの栄養改善」と、妊産婦と母親の健康改善を図る「産前検診」などを実施しています。

子どもの健康改善は母親から

「栄養」ということばから連想されるものといえば食べ物ですが、女性の産前産後のケアが、子どもの発達に大きな影響を及ぼすため、事業は食物保全だけでなく保健医療分野にもわたっています。

実際、UNICEFが発表した「栄養不良と死亡の原因」（1992年）では、栄養不良と死亡の直接の原因は疾病や不適切な食物摂取であっても、原因を突き詰めていくと家庭での不十分な食物保全状況であったり、不適切な母子保健、不十分な保健サービスと不衛生な環境に行きつくことが指摘されています。母親の産前産後のケアを徹底し、健康な子どもが生まれるようにすること、そして1歳未満の間に母乳を適切かつ十分な量を飲ませたり、適切な補助食を与えることなど、生後すぐの世話が、子どもをその後も生きながらえさせることができるかどうかに影響するのです。

ベトナムは男女間の格差はほとんどないものの、やはり家事や食事は女性の仕事です。女性が栄養価の高い調理方法を知っているか、子どもの養育方法や母乳の大切さを分かっているか、そして自分自身の健康管理に気をつけているかが、子どもにとって大きく影響するといえます。

事業管理についての指導も実施

SCJでは単に事業を行うだけでなく地元政府関係者が自分たちだけでも事業の進捗状況を管理し、ひとつひとつの活動を行うに当たって陣頭指揮を執ったりすることができるように指導しています。





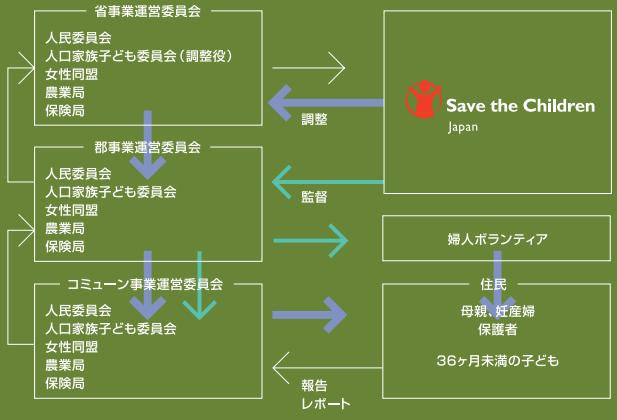






Note 3

ベトナムにおけるSCJ活動の流れ



ベトナムではNGOが活動を行う場合、政府側機関とパートナーシップを組むことが必要とされています。「総合的子どもの発達事業」では、イエンバイ省の行政機構に従って、まず省レベルで人民委員会（日本でいう県庁に当たります）と覚書を結び、その方針に沿って人口家族子ども委員会、農業局、保健局、女性同盟といった政府系組織・大衆組織と協力しています。

早くも成果が表れている

事業を開始してから、1年以上が経過しました。2003年7月の事業着手時のルックイエン郡での測定結果では、5つの村で年齢に比して体重が少ない子どもの率が平均41.9%、日々の食物摂取不足や家庭環境、貧困などによって引き起こされる発育不全が平均33.1%でした。1年1ヶ月後の2004年8月現在、前者の数字は5カ村平均で31.2%にまで改善されています。

事業実施期間は2年間で、ルックイエン郡では来年の夏には事業を終える予定です。しかしこれは、事業の完全な終結を意味するものではありません。SCJが直接関与して行う研修や指導者訓練が終わるということにすぎず、その後もSCJは、間接的に事業のモニタリングを続けます。今後は、事業管理やモニタリング、体重測定の方法、家庭菜園運営方法などを学んだ地元政府関係者が、率先して地元住民を率いて活動を行っていくことになります。SCJは折に触れて、技術的助言や指導を行います。

もともとSCJが実施する各種の研修事業は、ベトナムの省・郡・村・部落の各部局の政府関係者を対象としており、一時的な支援に終わらせず、地元に根づく事業を目的としています。

自覚と責任感の芽生え

事実、過去に同様の栄養改善事業を実施したタンホア省ビンロック郡（1998年から2001年までJICA開発福祉支援事業による支援を受けた）では、SCJの直接関与が終わっても栄養不良率は悪くならず、むしろ順調に改善されているとのデータが出ています。

これは、SCJスタッフが1カ月に1回は必ずモニタリングして活動の継続を確認し、相談役として人々と共にいるだけでなく、省から部落まで、関係者が積極的に関与し、また地元政府関係者と地元ボランティア、そして子どもの母親とその家族が、事業をきっかけとして、子育てや栄養、健康に関する問題をあらためて認識し、様々なことを学び、多くを自身の生活に取り入れていったことから実現したことです。地元の問題を解決し、それを維持していくのは自分たちの責任であること、こうした自覚と責任感が、事業期間を通じて彼らに芽生えたのです。

NGOが活動を行う場合、ベトナムでは政府側機関とパートナーシップを組むことによる成果といえます。

母親の笑顔を励みに

SCJベトナム事務所は、国家医師資格を持つ者や、農業省に長く勤めた経験のある者など、専門分野に特化した優秀なベトナム人スタッフを抱えています。彼らは自分の国の憂慮すべき状況を自分たちの手で変えようと、真剣に取り組んでいます。もちろん、毎日の業務はラクなことばかりではありません。事業地では、説明しても分かってもらえなかったり、地元での習慣や文化が根強く、女性たちが頑なに変化を拒んだり、山がちな地形で車が通れず、小川を幾つも越え、竹で組んだ橋を渡って3時間も4時間も歩いてようやく村まで辿り着く、といったこともしばしばです。それでも、事業で最初に体重を測ったときには、生後1年なのに3キロもない小さなぐったりした赤ちゃんが、目に見えて太って元気になっていく姿は、どんな疲れや辛さも吹き飛ばしてくれます。そして、そんな我が子の成長を嬉しそうに見つめる母親の笑顔が、何よりのプレゼントなのです。

（ベトナム事務所代表 藤原純子）



Afghanistan/ Myanmar/ Nepal/



Afghanistan

●アフガニスタン

ノリカさんありがとう、今までも、これからも。

ーセーブ・ザ・チルドレン藤原紀香アフガン基金報告ー

2千万円を超える基金に

女優の藤原紀香さんは、2002年以来「セーブ・ザ・チルドレン藤原紀香アフガン基金」を開設し精力的な支援活動をしてくださいました。彼女が撮影した写真展は、2002年～03年に日本全国7カ所で開催された後、今年はニューヨークでも開催され、大きな反響を呼びました。写真展やTシャツ販売の収益金からなる基金には、2004年9月末現在で22,048,797円の寄付が集まっています。

これらは女子小学校の建設、バーミヤンの小学校教員研修、カブールの女子を対象とした識字教育と地雷回避教育、子どもの権利に関する研修などに使わせていただきました。

住民も懸命に奉仕

藤原紀香基金事業のハイライトは今年6月11日に竣工式を迎えたバーミヤン県アンダー村女子小学校の建設です。生徒数約250名のこの学校は、以前は崩壊しかけのマドラサ（神学校）を利用していました。部屋は暗く狭く、一部のクラスは廊下にはみだし、天井は今にも崩れそうという環境でした。

学校建設で最も難航したのは土地の選定です。村から遠い、敷地が狭いなど様々な問題があり、5つ目の候補地でようやく確保できました。住民は、少しずつお金を出し合い約10万円でその土地を購入し、建設に必要な日干し煉瓦の半分、藁、整地作業などを無償で引き受けてくれました（住民参加による学校づくりを目指しました）。学校の先生の月給が約4千円であることを考えると、アフガンの人々の提供してくれたものの大きさが分かります。（アフガン事務所代表 金谷直子）





＜アンダー村女子小学校＞
昨年夏に着工し、工事を一時中断した長い厳冬期を経て、1年がかりで完成しました。竣工の際には学校の正面玄関横に藤原紀香基金の記念プレートをはめ込みました。

アンダー小学校の児童からのメッセージ

私たちの学校は、とてもきれいで、必要なものが揃っています。私たちは学校に行って勉強します。感謝しています。 みんなとっても幸せです。（ファーティマ・四年生）

学校を建てて下さった紀香さんと日本の皆さんに、心から感謝の気持ちを送ります。 新しい校舎はとてもうれしいです。 勉強に対する好奇心もいっぱいです。学校に対する愛情をもって、もっともっとたくさんのことを勉強したいと思います。（マリアム・一年生）

紀香さんからのメッセージプレート（訳）

大好きなアフガンのお友達へ
あなたたちの尊い夢や希望が叶いますように、ずっとずっと応援しています。また会う日まで、カンダクゥ。
みんなの心のお友達　NORIKAより

Emergency Report 緊急報告

スーダン危機に関して日本政府へ支援の拡大を要求

ーセーブ・ザ・チルドレン世界連盟ー

セーブ・ザ・チルドレン世界連盟では、オックスファム、カリタスと連名でこの8月末にスーダン危機に関して日本政府の支援増大を要請する手紙を、川口外務大臣及び外務省関係部署へ提出しました。その内容は以下の通りです。

「我々のスーダンにおける長い活動の中でも現在のダルフール地方の惨状は目を覆うものがあり、この状況に立ち向かうためには先進国の多大なる支援が必要である。我々は日本政府の国連への6万米ドルものスーダン援助を高く評価するものであるが、国連ではさらに160万米ドルを必要としており、状況は緊急を要する。日本政府の更なる支援を期待する」というものです。

先進8カ国（G8）の中で、日本の援助額が最も低く、続いてフランス・イタリアとなっています。フランス及びイタリア政府へも同様の手紙が提出されました。

Myanmar

●ミャンマー

料理コンテストを通じて 正しい知識と習慣をアピール

―全国栄養週間の式典開催（9月2日･3日）―

村にはたくさんの野菜がある

町の保健事務所と協力して、全国栄養週間の式典を、事業地のテゴン町（9月2日）とジゴン町（9月3日）で開催しました。参加者は、町平和発展評議会議長を始めとして、警察署長、教育事務所長など、町の役職者および町医務官や町病院のスタッフです。

まずは、ミャンマー事務所代表の和田のスピーチ。栄養不良の子どもが多く、子どもの生命が危険にさらされていること、必ずしも貧困が栄養不良の原因ではないこと、お金をかけなくても、正しい知識と習慣を身につけるだけで、子どもの栄養状態がよくなることを強調しました。

その後、SCJの村のボランティアによる人形劇が披露されました。声自慢のボランティアが、「田のあぜには、緑の野菜がたくさん生えている～♪　セリに、ヨモギ～♪　ハコベにハスに空心菜に･･･～♪」（和田注:草の名前は日本で馴染みのものに当てています）と有名なナツメロを歌うと、参加者は皆、そうだそうだ、お金をかけなくても村にはたくさんの野菜があるんだと、すっかり納得。ボランティアの操る人形たちが、生後6ヶ月までの赤ちゃんには母乳だけをあげること、その後は、野菜や肉や魚をバランスよく食べさせなくてはならないことを説きました。

全国栄養週間:ミャンマー政府は2003年より栄養に関する国民の意識向上を目的に栄養週間を実施。今年は9月1日～7日の一週間開催されました。

栄養を逃がさないお米の炊き方

このイベントのハイライトは、料理コンテストです。SCJの栄養改善プログラムに参加しているお母さんたちが、2人一組で全5組（10人）でタミン･イエ･カン、野菜炒め、卵カレーという3種目の料理を作り競います。どれも、SCJの給食で、子ども達に食べさせているもの。タミン･イエ･カンとは、適量の水でご飯を炊くことです。

ミャンマーでは、ご飯を炊く時、水を多く入れて、米をゆで、炊き上がったら、余分の水を捨てます。そうすると、大切なビタミンBが、水と一緒に流れてしまうのです。そのため、ビタミンBの豊富な米を食べているにもかかわらず、ビタミンB不足で死んでしまう子どもが少なくありません。

町病院の敷地内に、即席の台所が用意されました。レンガの上に、大なべを載せ、薪で火をおこします。まるで、キャンプのよう。何度も練習したのでしょう、かなりの量の米ですが、どのお母さんも、焦がすことなく、水を余らせることなく、上手にタミン･イエ･カンを炊き上げました。婦人会の面々が、清潔さ、手順、味などを採点し、賞品を授与。その後参加者全員で、できた料理をいただきました。

参加者は、タミン･イエ･カンの調理を見て、食べて、正しい知識･習慣の重要性をしっかりと認識してくれたようです。

（ミャンマー事務所代表　和田美穂）





Nepal

●ネパール

たくさんの子どもたちが犠牲になり、たくさんの子どもたちが助かった。

―ネパール洪水救援レポート―

死者100人を超える被害

今年の7月、南アジアでは豪雨による大洪水が発生し、ネパールでも、3日から12日にかけての豪雨で河川が氾濫、東部平野地帯を中心に大洪水となりました。被災地域は、全国75郡のうち27郡におよび、被災世帯総数15,000、死者は100人を超えました。SCJは現地パートナーNGOのアスマンとともに、直ちに救援活動を開始。最も被害を受けた764世帯に対して迅速に救援物資を配布し、効果的な活動として高い評価を受けました。しかし現場では様々な困難にも直面しました。

保健所員の派遣を直訴

16日、サルラヒ郡ラクシミプル村を訪れたアスマンの女性スタッフは、子どもが重症の下痢に罹っているのを発見しました。詳しく調査すると、下痢に罹っているのは大人も含めて21人で、うち11人が5歳以下の幼い子どもたちでした。保健所に駆けつけた彼女は実情を訴え、手当を始めるよう依頼したのですが、保健所員の答えは「出張費を払え」という信じがたいものでした。怒りで顔を真っ赤にした彼女は、数キロ離れた郡庁にある保健事務所に辿り着き、所長にこう直訴したのです。「保健所員は、出張費が貰えなければ治療には行かないと言っています。しかし村には21人の下痢患者がいて、半分は子どもで重症です。放っておいて取り返しがつかないことになったら、あなたの責任です」と。

所長はその所員を一喝、ただちに現場に急行させました。

たくさんの子どもたちが犠牲になりました。しかし、救うことができた子どもたちもまた、たくさんいたのです。

（ネパール事務所代表　定松栄一）



Interview

with Dr. Koda

医師 鴻田次章さん



鴻田 次章（こうだ つぐあき）
日本小児科学会専門医
医学博士

1960年　慶應義塾大学医学部卒業
1961年　慶應義塾大学医学部小児科入局
　　永寿病院小児科部長を経て
1975年　雅叙苑クリニック開設、現在に至る

改めて考える「栄養不良」
専門家に聞きました　栄養不良とは何？　なぜ危険？

ご存じでしょうか?世界で毎年400万人を超す新生児が死亡し、5歳未満児の死亡率は1000人当たり126人(2001年Unicef資料)を数えます。その主な原因は、妊娠中の母体の不健康、子どもの栄養不良です。世界では5歳以下の子どもの3人に1人が栄養失調の状態にあり、弱者である子どもの受ける影響は計り知れません。

Q.栄養不良の定義とは?

A.医師として栄養不良と判断する基準は血液の生化学成分です。まず、食べ物からくる食事性の貧血。また、血液中のタンパク質が不足している低タンパク血症というのがあります。もちろんビタミンの問題も大きい。車でいうと、車を動かすのはガソリンですが油を差さないと車は走らない。その油の役目がビタミンです。

Q.大人の栄養不良と子どもの栄養不良で、より危険なのは?

A.どちらとは一概には言えない。一つ言えることは、乳幼児の栄養不良は非常に問題だということ。例えば低タンパク血症になると免疫力に異常が起きる。そうすると感染しやすくなる。伝染病に掛かる心配が大きいですね。また、脳の発育を考えると、栄養が悪ければ当然脳の発育は悪くなるから、これも大きな問題です。

Q.母親に栄養の問題がある場合、子供に影響すると思いますが...

A.その通りです。一つは母乳の問題。お母さんのおっぱいに栄養がないから子どもが栄養失調になる。そして、正しい食事の与え方を知らない母親の知識不足によって起きる栄養失調がある。また、母親自身が栄養不良なので子どもが低体重･低たんぱく質で生まれて感染の問題が起こる。

Q.もし栄養不良児と判断したら、どのような治療をするのでしょうか?

A.大きくいって生活指導ですが、その中で一番重要なのはやはり食事です。例えば高タンパクのものや鉄分をとるようにするなどいろいろあります。ビタミン不足からも大きな病気になることがあります。僕自身、終戦直後食糧事情が悪く心臓が肥大したことがあります。原因はビタミンB１不足でした。食事の指導というのはとても大事です。

Q.SCの活動は一方的に物を与えたり、教育を施すのではなく、コミュニティーの人々を取り込んで皆でやっていこうという支援活動をしています。

A.非常にいいやり方だと思います。すべての基本は全体的なレベルアップ、イコール教育です。

Q.実際に栄養不良児が患者で来たことがありますか?

A.近くにあるインドネシア大使館の子どもたちが栄養不良だったことがあります。大使館に来るような人たちは、インドネシアでもレベルが高い方だと思うし、食糧事情に問題のない日本に住んでいるわけですが、やはり食事に関する知識がなかったり、食習慣の問題で栄養不良が起こるんですね。日本人でも２歳で８kgしかない子を診たことがあります。共稼ぎの親であまり育児に熱心でない親でしたが、最終的に白血病を発症してしまいました。

Q.栄養不良を改善するにはどれ位かかるものでしょうか?

A.子どもの場合は少し栄養を与えればすぐに効果が出ます。以前、生後3カ月の乳児でしたが、生まれた当初は4kgあったのに、それが3kgまで痩せてやってきた。胃の上にできていた塊りを切って胃に食べ物が通るように治療したら、1日に300gずつ増えていきました。

Q.途上国の栄養不良児問題に対して、医師の立場からNGOに何を期待しますか?

A.NGOの活動はすごく大切。栄養不良児は早期に発見して必要な栄養を与えれば治りも早いが、食環境や食習慣などで難しい部分もある。そういった場合に、代用できるものの知識を得る、というのは大切な方法です。ただ、状況の違いによって援助の方法も違う。アフリカの場合だったら産児制限など人口増加問題に取り組むのが大切。単に金･物を注ぎこんで終わりというのはナンセンス。症状をただ改善して終わるのではなく、さらに一歩前進してその原因を根絶するということも同時にやっていかないといけないと思います。その点、SCJがネパール、ベトナム、ミャンマーなどでテーマを絞って活動しているのはとても良いですね。

Speaking Out

プロジェクト進行中!

スピーキングアウトは、2004年度より本格始動した日本の子どものための教育事業です。4月から9月までの間に計14カ所で実施し、のべ約50名のボランティアスピーカー、約850名の子ども（一部大学生・社会人）が参加しました。この間の活動の特徴として、東京では学校だけでなく地域のボランティアセンターからの依頼が増えていることがあげられます。8月にボランティアセンター武蔵野にて、夏休みにボランティアを体験した小学生～社会人約50名を対象にスピーキングアウトを実施しました。その際には、“国際協力できるボランティア”“セーブ・ザ・チルドレンでボランティアとして活動する意義”などをスピーカーが自ら語る場面を織り交ぜることで、参加者の興味を引きだし、楽しんでスピーキングアウトに参加してもらうことができました。これを機に今後は社会教育分野でもスピーキングアウトの意義や可能性を見出せるのではと思います。

一方、大阪ではプログラム作成段階から子どもが参加するといったように、子どもや学校とパートナーシップを築きながら、継続的な活動を続けていることが特徴としてあげられます。

まだまだ課題もありますが、今後も、子ども・学校・地域とのつながりを大切にしながら、スピーキングアウトを発展させていきたいと思います。



「スピーキングアウト@ボランティアセンター武蔵野」に参加して～

“自分がやったる”って人がもっともっと増えれば、世界って変わると思う。（東京・高校3年生）

日本人が当然のこととして思っていることができていない状況をみて、自分の価値観の狭さを思い知らされました。（東京・社会人）

スピーキングアウトのプログラム作成に参加して～

誰かのために何かをすることは簡単なようでいて、難しいこともあります。けれど、小さなこと、例えば子どもの権利を小学校などで話していくことは、きっと私にも出来る。私は、自分に出来ることを少しずつでもやって行きます。（大阪・高校1年生）

Volunteer

イラン地震支援活動の報告会を実施

8月6日東京にて「イラン緊急援助の現場から～揺らぐ子どもたちの心」と題し、2003年12月にイラン南東部バムでおきた大地震に対する緊急支援活動の報告会を開催しました。

当日は報告会の企画・運営を担当したインターンやボランティアの方々、職員を含め約50名が参加。約半年間にわたり現地で活動していた田沢職員の報告からは、現地や被災者の方々の切実な様子が伝わってきました。

インターンより一言

"やります!たくさん集めましょう!"と勢いよく返事したにもかかわらず、ボランティア活動初体験の私は報告会が終わる瞬間まであたふたしていました。“ボランティア”と一括りに言いますが、職業・ボランティア経験・性格にいたるまで多様です。バックグラウンドの違う“人”と意見交換をしながら創り上げた報告会は、大学での勉強とは違い、メンタル・スキル双方の向上につながりました。（粟野弘子さん）



Fundraising

> “セーブ・ザ・チルドレンに協力する方法は?”
> “どんなことをしているの?”
> みなさまからのご質問に、わかりやすくお答えします。



ホームページがリニューアル!

Q.セーブ・ザ・チルドレンは、どのように始まったのですか?

A.セーブ・ザ・チルドレンは、1919年にイギリスで創設されたNGOです。創設者のエグランタイン・ジェブは、「私には11歳以下の敵はいない」と第一次世界大戦で家を失い、傷つき、孤児になった子どもたちを救済するために活動をはじめました。セーブ・ザ・チルドレンの考え方は世界中に広がり、現在では世界的ネットワークのもと115カ国以上で活動を展開しています。

Q.どんな子どもたちを支援の対象としているのですか?

A.民族・宗教などの区別なく世界中すべての子どもたちのために活動をしています。特に貧困や紛争などで、教育や保健といった基本的な社会環境に恵まれない子どもたちへの活動に重点をおいています。

Q.活動期間は2・3年なのに、なぜ長期的な視点が必要なのですか?

A.支援国の人々にとって、いつまでも支援活動に頼って生活していくのは健全な状態ではありません。重要なのは、活動期間内に出した結果ではなく、将来的な発展に続く成果が出せるかどうかです。セーブ・ザ・チルドレンの支援が終了した後も地域の人々で活動を継続していくことができるように、サポートしていくのが私たちの役割です。

Q.なぜ大人への支援もしているのですか?

A.私たちの活動は、子どもたちを取り巻く環境、親・家族・地域社会と切り離して行うことはできません。例えば、子どもたちが学校に行きたくても、親が教育の必要性を理解できなかったり、家の手伝いを強制したりすると、学校には行かせてもらえません。また文化的な背景で、女子が教育を受けることが認められない場合もあります。支援活動を一時的なものとしないためにも、私たちは大人と一緒になって子どもたちをとりまく環境すべての改善をめざして活動しています。

ホームページ リニューアル!

www.savechildren.or.jp

2004年12月より、セーブ・ザ・チルドレン・ジャパンのホームページが新しくなります。より使いやすく、アクセスしやすいコンテンツになります。セーブ・ザ・チルドレンのビジョン、活動内容がわかりやすく掲載され、支援への参加がネットからもしやすくなります。今後世界中のセーブ・ザ・チルドレンの活動を随時アップし、支援者の皆さまへ最新の情報をお届けいたします。ぜひ、ホームページにアクセスしてみてください!

ご寄付のお願い

継続サポート

継続的なご支援をお願いします。

○Child Link

2005年から日本のみなさまに支援いただける国が拡がります。世界連盟のネットワークを活かし、New Child Linkがスタート。参加いただいた方には、定期的に支援国の情報や子どもたちの様子を盛り込んだレポートをお届けいたします。

詳しくは資料をご請求下さい。

いつでもいくらでもサポート

○ご寄付や募金は、随時受け付けています。
振込手数料免除の下記口座をご利用下さい。
振込先:郵便振替口座 00900-1-120760
加入者名:セーブ・ザ・チルドレン子ども基金

会員になる

○個人維持会員 年会費一口50,000円
セーブ・ザ・チルドレン・ジャパンの総会に出席して、意見を反映させることができます。

○ＳＣＪ会員 年会費一口5,000円

その他、企業としてのサポートやボランティアも随時募集しています。
詳しくは、フリーダイヤルまたはFAX・メールにてお問い合わせ下さい

(フリー)0120−317−502
FAX 03-3516-8923
e-mail info@savechildren.or.jp

税控除のご案内

セーブ・ザ・チルドレン・ジャパンは、特定公益増進法人として外務省の認可を受けています。2004年1月1日～12月31日の寄付合計が10,000円を超える方は、一定の要件下で控除の対象となります。申告の際には“特定公益増進法人の証明書”と“寄付領収証”が必要になりますので、必要な方は事務局までご連絡下さい。

Partnership



SCパートナーをご紹介します。
パートナー様からご協力いただいたご寄付は世界中の子どもたち
の支援活動や日本の子どもたち向けの国内事業に生かされています。

◆Family Mart
（ファミリーマート株式会社）

ファミリーマート様には、一般の方でも気軽に国際協力にご参加できるよう、様々なサポートを頂いております。

*募金箱の設置
1993年より全国の店舗に募金箱の設置をしていただいております。その額は累計で約4億9千万円（10月15日現在）となりました。

*ポイント募金
ファミマカードでたまったポイントを募金に交換するサービスを行っていただいております。（2004年10月19日スタート）。

*SC商品販売
バレンタインチョコレート、年賀状などの売上げの一部をご寄付いただいております。2005年の年賀状（予約印刷、店内販売）販売でもご協力いただきます。



◆スマイルライン・デンタルクレジットの開始
（8月21日より）

デンタルクレジットの手数料の一部をご寄付いただいております。

*お子様の歯列矯正など高度な歯科治療を可能にする患者さん向けのデンタルクレジットです。

http://www.smileline.jp

◆MHDディアジモ　モエ ヘネシー株式会社

ドン　ペリニヨン（モエ･エ･シャンドン社）の日本総販売元であるMHD　ディアジオ　モエ　ヘネシー株式会社様には、1987年以来「ドンペリニヨン セーブ･ザ･チルドレン チャリティ･ガラ」を開催していただき、セーブ･ザ･チルドレン活動を支えていただいています。

ー今年も華やかに開催ー
第17回「ドン ペリニヨン セーブ･ザ･チルドレン チャリティ･ガラ」

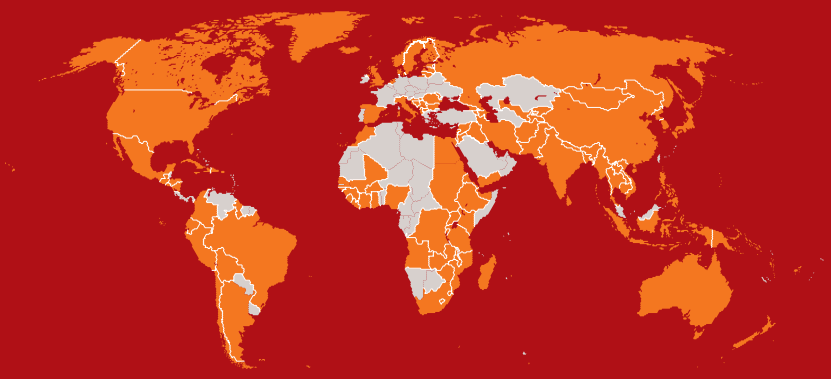
世界最高峰のシャンパン『ドン　ペリニヨン』と伝統ある帝国ホテルの料理が饗されるシャンパン･ディナーとクラシック･リサイタルをお楽しみ頂く「ドン　ペリニヨン　セーブ･ザ･チルドレン　チャリティ･ガラ」が6月15日帝国ホテルにて、紀宮殿下のご臨席を賜り華やかに開催されました。

今年は、映画「タイタニック」に出演し高い評価を得ているサロンミュージックのトップグループ“イ･サロニスティ”と、国内外のコンクール入賞者の音大生で編成された日本版女性十二楽坊と話題のグループ“YBPストリングス”が素晴らしい演奏を披露してくださいました。

「ドン ペリニヨン セーブ･ザ･チルドレン チャリティ･ガラ」への会費および寄付はセーブ･ザ･チルドレンの活動を通じて、世界中の子どもたちを支援するために役立てられます。







セーブ・ザ・チルドレンのビジョン

セーブ・ザ・チルドレンは

子ども一人ひとりを尊重する社会

子どもの声に耳を傾け、そこから学ぶ社会

すべての子どもが希望と機会の持てる社会

の実現を目指して活動しています。

社団法人 セーブ・ザ・チルドレン・ジャパン

発行人：立野純三

発行日：平成16年12月1日

〒103-0021 東京都中央区日本橋本石町3-2-6 ストークビル 8F Phone:03.3516.8922 Fax:03.3516.8923

www.savechildren.or.jp